

カポージェ小説における 押韻形式の多様性

大 園 弘

はじめに

筆者は拙著『カポージェ小説の詩的特質 音と文彩』(2016)において、韻律・直喩・隠喩・その他のレトリックの観点からカポージェの小説(散文)が「詩的」と称される理由を探った。⁽¹⁾同書第1章では、カポージェの21短編小説、3中編小説のなかから韻律の点で極めて印象的な事例を取りあげ、個別の事例の考察をととして、韻と律への配慮がカポージェの小説(散文)に詩的な雰囲気 را帯びさせている一要因であることを明らかにした。だが、同章で取りあげた事例は、韻と律がカポージェ小説を詩的に響かせる要因であることを立証するためのごく一部にすぎない。

よって本稿では、同書で割愛したその他の事例を取りあげる。カポージェ小説における押韻形式が如何に多様であるか、また、そうした多様性がカポージェの小説(散文)を詩的に響かせている要因であることをあらためて強調することが本稿の目的である。第1節では本稿が注目する押韻形式について言及する。第2節では押韻形式ごとに個別の事例をみていく。対象とするのは以下の12作品であり、事例は都合46にのぼる。事例の考察に際しては、個別に押韻形式の特徴を明示したうえで、事例を掲げていく。事例の押韻箇所にはボールド・イタリックを施し、拙訳を付している。

“ Jug of Silver (1945)

“ Miriam (1945)

“ The Headless Hawk (1946)

“ Children on Their Birthdays (1948)

Other Voices, Other Rooms(1948)

“ Master Misery (1949)

“ House of Flowers (1951)

The Grass Harp(1952)

“ A Christmas Memory (1956)

“ The Thanksgiving Visitor (1967)

“ Mojave (1975)

“ One Christmas (1982)

第 節 本稿が注目する押韻形式

本稿で注目する押韻形式は、主として頭韻である。一部の事例には脚韻、視覚韻、類韻、同韻、子音韻なども含まれている。

『レトリック事典』によると、頭韻(頭音反復)とは「或る子音(字)を核とする同一の響きを、いくつかの語の冒頭に繰り返すこと」²⁾である。カポーティの小説(散文)には “ x ” と “ z ” を除くすべての子音字について頭韻の事例が確認できる。頭韻による効果はリズム感、テンポの良さ、口調の良さ、ユーモアの創出などさまざまであり、なかには場面の「静けさ (silence) の雰囲気を醸し出すために “ s ” ではじまる単語を連続させたり、登場人物の逸る気持ちを伝えるために半母音 “ w ” ではじまる単音節の単語を連続させるといった精巧な事例も見受けられ、これらの工夫が同時に詩的效果を高めることにもつながっている。

同じく『レトリック事典』によると、脚韻(末音反復)とは、英詩においては行

末尾の押韻のことである。⁽³⁾ 散文には英詩と同じ意味での「行末尾」は存在しない。したがって、散文における脚韻は、本来的な意味での脚韻(英詩における脚韻)の概念とは異なるものとして定義されなければならない。本稿では、連続する単語の末尾、もしくは、近い位置に配置された複数の単語の末尾の音の一致を脚韻と見なすことにする。また、岡崎正男に倣い、単語の末尾の音の一致は、母音である場合(末母音反復)と子音である場合(末子音反復)のいずれの場合も脚韻と見なしたい。⁽⁴⁾ 散文における脚韻の効果は口調の良さを醸すという点であろう。

視覚韻とは「have と gave のように詩行の末尾が発音は違っていても、つづりの上では踏韻しているように見えるもの」⁽⁵⁾である。「韻」は「聴覚(音)」と不可分である。だが、文学作品の読者は文字(視覚)を通して音をイメージする。実際に発せられる音が異なるとしても、2語間のつづりの共通部分を視覚的に捉えることで、読者は自ずと押韻を意識する。視覚韻は言葉遊びとしての側面が強いと言えよう。

類韻とは「penitent と reticence のように、強勢のある音節中、同じ母音を持ち、子音を異にする2語の間に用いられる押韻」⁽⁶⁾である。類韻により、リズム感、テンポの良さ、口調の良さが醸し出される。

同韻は「同一語の反復による韻律」⁽⁷⁾と説明される。本稿では“... forest restless ...”を同韻の事例として挙げているとおり、二語間の一部が共通であるものも同韻と見なしている。同韻は言葉遊び的な趣向が強く、ユーモラスな響きが醸される。

子音韻は複数の単語間の子音が同一であるような押韻である。頭韻や脚韻の場合とは異なり、子音の位置は問わない。

第 節 押韻形式の個別事例 ～①⑨

同一子音字の頭韻事例 [1]～[14]

カポージェティ小説において、頭韻に活用される子音字は、前述のとおり “ x ” と “ z ” を除くすべてである。だが、以下に掲げる事例からも明らかなとおり、圧倒的に “ s ” が多いのが特徴である。他の子音字よりも “ s ” ではじまる単語の数が多いのがその理由の一つであろうが、それ以上に “ s ” の響きに対するカポージェティの感受性の鋭さの表われとみるべきであろう。

頭韻に関してさらに特徴的なのは、頭韻に該当する単語の音節の数が、ごく一部の例外を除き、2 音節以内であるという点である。以下の事例 [1]～[14] に限ってみても、頭韻にからむ約80語のうち、3 音節から成る単語は僅かに 1 語(事例 [2]: sub-scrip-tion)のみである。2 音節から成る単語は24語(全体の約30%)、単音節の単語は54語(同、68%)と、単音節の単語が大半を占める。また、2 音節の24単語のうち、striv-ing(事例 [1])や sound-ed(事例 [5])のように単音節の単語の派生語が半数の12語を占めていることを考えると、頭韻にかかわる単語のほとんどが単音節の単語をベースとしていることがわかる。ほぼ等間隔に同じ音が数回繰り返されるために、単音節を中心とした単語による押韻効果は、リズム感、テンポの良さ、口調の良さとなって表われる。

最後につぎの点もカポージェティ小説における同一子音字の頭韻の特徴の一つとして指摘しておきたい。

Mickey Mouse や “ safe and sound ” などの例に見られるように、頭韻は子音字を核とする 2 語間の語頭の音の一致を基本単位とする。ところが、以下の事例 [1]～[14] から明らかなとおり、カポージェティ小説の頭韻は 4 語を超える単語間の頭韻がけって珍しくはない。これにより、読者は自ずと頭韻に注意を引きつけられ、カポージェティの文章に音楽的要素(音響効果)を感じ取る。

“s”[s]の頭韻事例

[1] As she⁽⁸⁾ stood, striving to shape a sentence which would somehow save the brooch, it came to Mrs. Miller there was no one to whom she might turn; she was alone; a fact that had not been among her thoughts for a long time.⁽⁹⁾

どうにかしてブローチを奪われずにすむ言葉がないものかともがきながら立っていると、ミラー夫人は、自分には頼れる存在がいけないことに気づいた。久しく念頭に浮かぶことのなかった事実である。

[2] Well, I'm disappointed. Who wouldn't be? With socks, a Sunday school shirt, some handkerchiefs, a hand-me-down sweater and a year's subscription to a religious magazine for children. *The Little Shepherd*. ("A Christmas Memory" p. 224.)

あーあ、ぼくはがっかりだ。誰だってがっかりするだろう。靴下、日曜学校用のシャツ、何枚かのハンカチ、おさがりのセーター、子供向け宗教雑誌の年間予約購読券。『幼い羊飼』

[3] The sultry smells of summer and sweet shrub and dark earth were heavy, and the itchy whirr of bumblebees stung the silence. (*Other Voices, Other Rooms* p. 64.)

夏と甘く匂う低木、それに黒い大地が放つ蒸し暑い香りがむっと重たい。マルハナバチのむずがゆいブーンといううなりが静寂を刺す。

[4] "Such a sweet song," said Amy. "So sad. I don't know why you never let me play the pianola any more." (*Other Voices, Other Rooms* p. 80.)

「すごくすてきな歌だわ」エイミーは言った。「とても悲しくて。自動ピアノをかけさせてくれない理由がわからないわ。」

[5] ..., and Idabel's voice, speaking now, sounded soft, and snow-hushed: ... (*Other*

Voices, Other Rooms p.131.)

・・・そして、話しかけてきたアイダベルの声は、やさしく、雪のように静かに響いてきた・・・。

[6] Behind the foliage, a bull-toned voice, and another, this like a guitar, blended as raindrops caress to sound a same rhythm; an intricate wind of rustling murmurs, small laughter followed sighs not sad and silences deeper than space. (*Other Voices, Other Rooms* p.187.)

木立の向うから、雄牛のような声に続いてもう一つ声が聞こえてきた。こちらはギターのような声で、雨雫の愛撫のように調和して同じリズムを刻んでいた。入り組んだ風のような密かな囁き声と小さな笑い声が、悲しみとは異なるため息と、空間よりも深い静けさのあとに続いて聞こえてきた。

[7] Dolly seemed stunned, at the same time self-possessed. You see, she simply dusted her skirt and said: ... (*The Grass Harp* p. 32.)

ドリーは茫然としているように見えたが、それでいて落ち着いているようでもあった。というのも、彼女は平然とスカートの埃を払い、こう言ったのだ・・・。

“ h ” [h] の頭韻事例

[8] It was seldom that she [Ottillie] thought of the mountains; and yet, after three years, there was much of the mountains still with her: their winds seemed still to move around her, her *hard*, *high haunches* had not softened, nor *had* the soles of *her* feet, which were rough as lizard's *hide*. (“House of Flowers” p.199.)

オテーリィが山の暮らしを思い出すことはめったになかった。にもかかわらず、3年たった今も、彼女には山の雰囲気が漂っていた。彼女のまわりには今でも山の風が吹いているようだったし、彼女の硬くせりあがった尻は柔らかくな

かったし、トカゲの皮のように粗い彼女の足の裏も同じだった。

[9] Since she [Otilie] could not read it, her first impulse was to tear it [the letter] up: there was no use *having* it *hang* around to *haunt* *her*. (“House of Flowers” p. 206.)

オテーリィは字が読めなかったので、はじめはその手紙を破ってしまおうかと思った。手元に置いておいて、気がかりになっても仕方がないと思ったのだ。

[10] Joel slumped like a dog on the floor before the *hearth*, and the *hermit* *handed* *him* a pillow for *his* *head*; ... (*Other Voices, Other Rooms* p. 223.)

ジョエルは炉の前の床のうで犬のように身を沈めた。すると隠遁者がジョエルに枕を手渡した・・・。

[11]...:*humped* grey *hounds* *hurtled* through the *halls*, ... (*Other Voices, Other Rooms* p. 225.)

・・・背を丸めたグレイハウンド犬が、ホールを駆け抜けた・・・。

[12] “My cousin Louise, she’s deaf,” said Joel, thinking *how* *he* used to *hide* *her* *hearing* aid, of *how* mean *he*’d been to *her*: the times *he*’d made that kid cry! (*Other Voices, Other Rooms* pp. 229-230.)

「いとこのルーズは耳が聞こえなかった。」ジョエルはそう言うと、かつて度々彼女の補聴器を隠したり、彼女に意地悪をしていたことなど、自分があの子を泣かせていた当時のことを思い出した。

“ f ” [f] の頭韻事例

[13] *F*arewell sighs of *f*olding *f*ans, the brute *f*all of male boots, and the *f*urtive step of tittering Negro girls... (*Other Voices, Other Rooms* p. 224.)

閉じる扇子の別れのため息、男のブーツの荒々しい足音、くすくす笑いをする
ニグロの少女たちの忍び足・・・。

“m”[m]の頭韻事例

[14]... and Joel tightened his *muscles*, hoping this *might make* the *mule's* load
lighter. (*Other Voices, Other Rooms* p. 217.)

・・・そしてジョエルは、ラバの荷を少しでも軽くできるのではと願っている
かのように、筋肉をこわばらせた。

同一母音・子音の脚韻事例 [15]~[17]

英詩における脚韻が余韻を醸すのに対して、散文における脚韻(語末の同音
反復)は口調の良さを醸す。事例[15]には“y”[i] 事例[16]には“er”[ər]
事例[17]には“ing”[iŋ]の脚韻例を挙げた。このうち事例[17]は、配置の点
で無理はあるとしても“always”と文尾の“birthdays”を脚韻と見なせなくては
ない。また本事例には、反復法というレトリックが用いられている。“somewhere
else”という名詞句の繰り返しは、文にメリハリをつける効果をあげている。
さらには“where”以降の2つの等位節はまったく同じ文構造であるうえ、
“streets”と“birthdays”以外のすべての単語の音節数はいずれの等位節とも
にまったく同じであるために、一読しただけで深く印象に残る名文である。こ
れらの特徴を備えたこの引用文に物語のタイトル“Children on Their Birthdays”
が含まれている点も見逃せない。

“y”[i]の脚韻事例

[15] No, child, I [Mrs. County] won't kiss you. I'd be mortified to dirty your finery

with my bakery mess. (*The Grass Harp* p. 97.)

だめよ、坊や。キスはしないわ。坊やの晴れ着をパンの粉で台無しにしたくな
んかないのよ。

“er”〔ər〕の脚韻事例

[16]The water, deeper here than where he [Joel] and Idabel had taken their bath, was also darker, a muddy bottomless olive, and when he knew they did not have to swim over, his relief gave him courage enough to travel down under the mill where there was a heavy but rotting beam on which they might cross. (*Other Voices, Other Rooms* p.178.)

この水は、ジョエルとアイダベルが水浴びをした場所よりも深く濃かった。
ぬかるんで水底は見えず、オリーブ色だった。ジョエルは泳いで渡る必要がな
いことに気づくとホッとして、自分たちが渡ることになるずっとしりとしている
が腐りかけている梁のある水車小屋の下を進んでいく勇気がわいた。

“ing”〔ɪŋ〕の脚韻事例

[17] [Miss Bobbit] think always about somewhere else, somewhere else where every-
thing is dancing, like people dancing in the streets, and everything is pretty, like chil-
dren on their birthdays. (“Children on Their Birthdays” pp.144-145.)

私はいつもどこか別の場所のことを考えているの。通りで踊っている人たちの
ように何もかもが踊っていて、誕生日の子供たちのように、何もかもがかわい
い場所のことを考えているの。

頭韻と脚韻が同じ子音の事例 [18]・[19]

以下の2事例は頭韻と脚韻が同じ子音〔s〕・〔θ〕の事例である。頭韻と脚韻を同じ音に揃えることで、言葉遊び的な趣向が生じる。

事例 [18] の頭韻と脚韻の一致は、“ ...,she felt a curious sadness, a sense of loss, ... ” の一節に見て取れるが、この一節の直前までに“ s〔s〕”〔s〕の頭韻は9回(9語)も繰り返されている。この工夫により、“ ...,she felt...” の一節がひときわ目立つのであるが、この一節はこの物語(“ Master Misery ”)のテーマ 都市の破壊性とその犠牲者 と深く関わるものであることを見落としてはならない。主人公のシルヴィアは友人を頼って田舎からマンハッタンへやって来る。彼女はあるきっかけから、夢(夜見る夢)を売りはじめ、やがて抜け殻のようになっていく。件の一節は、そうしたシルヴィアの状態を伝える重要な一節である。作者は単語の意味と響きをうまく活用して、物語のテーマを強調し得ていると言える。

一方、事例 [19] は文意との関係で考えれば、言葉遊び的な趣向が強く、ユーモラスなトーンが醸されている。

“ s〔s〕”〔s〕の事例

[18] Before retiring, Sylvia took a Seconal, something she seldom did; but she knew otherwise she would never rest, not with her mind so nimble and somersaulting; then, too, she felt a curious sadness, a sense of loss, as though she'd been the victim of some real or even moral theft, as though, the boys encountered in the park had snatched (abruptly she switched on the light) her purse. (“Master Misery” p.159.)

自室に戻る前に、シルヴィアは睡眠薬を飲んだ。めったにないことだ。だが、そうでもしないと、頭がさえて動転した気分のままでは眠れないことは明らかだった。それに奇妙な悲しみも感じていた。実際に何かを盗まれたか、心を盗

まれたかのように喪失感を感じた。それはまるで、公園で会った少年たちから(と、彼女は突如灯りをつけた)ハンドバッグをひったくられたかのような感じだった。

“th”[θ]の事例

[19] [Ottolie] have five silk dresses and a pair of green satin shoes, I have *three* gold *teeth* worth *thirty thousand* francs, maybe Mr. Jamison or someone will give me another bracelet. (“House of Flowers” p.197.)

私はシルクのドレスを5着に、緑色のサテンの靴、3万フラン相当の3本の金歯を持ってゐるわ。ひよっとすると、ジェイミソンさんか誰かが、新しいブレスレットをプレゼントしてくれるかもしれないわ。

2種類の頭韻を含む事例 [20]~[25]

一文中に同じ音(子音)ではじまる単語が4回(4語)以上にわたって繰り返されることがカポーティの散文の特徴の一つであることは前述のとおりである。さらには、一文中に複数種類の頭韻を含むケースが多いのもまたカポーティの散文の特徴である。以下の6事例は2種類の頭韻を含む。

事例[20]は“w”[h] “wi”[h] から“h”[h]へ、事例[21]は“h”[h] から“w”[w]¹⁰⁾へ、事例[22]は“d”[d]から“f”[f]へ、事例[23]は“c”[k]から“s”[s]へ移行している。事例[24]は“b”[b]と“s”[s]が不規則に繰り返されている。事例[25]は“f”[f] “v”[v] “f”[f]と移行しており、“f”[f]と“v”[v]は無声・有聲の違いはあるが、調音点と調音法が同じであるために、音読をしてみると心地良さを醸す。

なお、事例[23]について、つぎの点を指摘しておきたい。本事例は“c”[k]と“s”[s]の2種類の頭韻を含んでおり、両者を合体させると[k s]という

音ができあがる。この音が “ ...cornhusks and croquer sacks...” というフレーズのなかの “ cornhusks ” と “ sacks ” に見てとれる点は実に興味深い。

“ w(h) ” [wi] / “ h ” [h]

[20] It was hard to look at Estelle, for she was in front of a *w*indow, and the *w*indow was filled *w*ith *w*indy sun, *wh*ich hurt Sylvia's eyes, and the glass rattled, *wh*ich hurt *h*er head. (“Master Misery” p.164.)

まともにエステルを見つめるのは難しかった。エステルは窓の正面に立っていて、その窓が風に揺れながらも、陽射しで溢れていたからだ。シルヴィアはまぶしかった。窓ガラスはガタガタと鳴り、その音のせいで彼女は頭が痛くなった。

“ h ” [h] / “ w ” [w]

[21] “There ain't none,” she [Zoo] said, violently shaking *h*er head, *h*er black greased *h*air waving *w*ith a *w*indy rasp like scorched grass. (*Other Voices, Other Rooms* p. 214.)

「何もありませんわ」ズーは激しく頭を振ってそう言った。油を塗った彼女の黒髪は枯草のように、風を受けてサラサラと揺れた。

“ d ” [d] / “ f ” [f]

[22] Drifting, *d*azzling fairytale *f*lakes. (“One Christmas” p. 288.)

ひらひらとまばゆく舞い散るおとぎ話のなかの雪片。

“c”[k] / “s”[s]

[23]It was an old wagon, wobbly and rather like an oversized peddler’s cart; the floor was strewn with dry cornhusks and croquer sacks which smelled sweetly sour. (*Other Voices, Other Rooms* p.30.)

それは古い馬車だった。ぐらぐらと不安定で、どちらかと言えば、行商人の大きめの手押し車といったところだった。床には乾燥したトウモロコシの皮と黄麻布の袋が敷いてあり、甘酸っぱい香りを放っていた。

“b”[b] / “s”[s]

[24]... and Mr Mystery, elegantly villainous in his black cape, appeared in their wake riding a most beautiful boatlike sleigh: it was made of scented wood, a carved red swan graced the front, and silver bells were strung like beads to make a sail: swinging, billowing-out, what shivering melodies it sang as the sleigh, with Joel aboard and warm in the folds of Mr Mystery’s cape, cut over snowdeep fields and down unlikely hills. (*Other Voices, Other Rooms* pp. 203-204.)

・・・すると、それに続いて、黒いケープをまとった優美な悪党姿のミステリーさんが、実に美しい船のような橇に乗って姿を現わした。橇は良い香りの木でできており、先端には赤い白鳥の彫刻が飾られ、銀色のベルがつなぎ合わされて帆を作っている。帆は前後に揺れ、風で膨らみ、ミステリーさんのケープに暖かく包まれたジョエルを乗せた橇が雪深い平原を切り進み、目もくらむばかりの丘を滑り降りるとき、橇の奏でる歌の何と感動的だったことが。

“f”[f] / “v”[v]

[25]He [Joel] looked into the fire, longing to see their [the dead’s] faces as well, and

the *f*lames erupted an embryo; a *v*eined, *v*acillating shape, its *f*eatures *f*ormed slowly ... (*Other Voices, Other Rooms* p. 223.)

ジョエルは彼らの顔も見てみたいと思いながら、火のなかを覗き込んだ。すると、炎が一つの胎児を噴きあがらせた。血管が浮かびあがり、ゆらゆらと揺れる輪郭だ。その目鼻立ちが徐々に形をなしていった・・・。

1 種類の頭韻 / 1 種類の脚韻の事例 [26]・[27]

では頭韻と脚韻が同じ子音の事例を 2 例挙げた。ここでは頭韻と脚韻が異なる事例を 2 例挙げたい。事例[26]は“*r*”[*r*] の頭韻と“*s*”または“*ze*”いずれも[*z*] の脚韻の組み合わせ、事例[27]は“*s*”[*s*] の頭韻と“(e)*d*”[*d*] の脚韻の組み合わせである。いずれの事例ともに、頭韻と脚韻が情景(内容)の美しさを強める効果をあげている。

“*r*”[*r*] / “*s*”[*z*] “*ze*”[*z*]

[26] A thunderburst of rain had for a moment drenched the hills that now, seen through the windows, shimmered like dragonfly wings, and a breeze, *r*ich with the scent of *r*ained-on flowers, *r*oamed the *r*oom *r*ustling the green and pink papers on the walls. (“House of Flowers” p. 210.)

突如襲ってきた雷雨が、一瞬のあいだ、丘を水浸しにした。窓越しに見るその丘は、トンボの羽根のように揺らめいている。雨雫を受けた花々の強い香りを乗せたそよ風が部屋のなかを漂い、グリーンとピンクの壁紙をサラサラと鳴らす。

“s”[s] / “(e)d”[d]

[27] *Stars sparkled, snow whirled inside my head; ...* (“One Christmas” p. 297.)

星はきらめき、雪がぼくの頭のなかで渦巻いた・・・。

1 種類の頭韻 / 2 種類の脚韻の事例 [28]

事例 [28] は 1 種類の頭韻 “s”[s] と 2 種類の脚韻 “un”[ʌn]・“se”“ce”[s] を含む事例である。本事例の “around” に注目すれば、“gun”、“spun” とのあいだに視覚韻を認めることができる。

“s”[s] / “un”[ʌn] “se” “ce”[s]

[28] *His [Riley Henderson’s] gun wavered, and he spun around, the squirrels swinging like a loose necklace. (The Grass Harp p. 25.)*

ライリーの銃は揺れ動き、彼がくるとからだを回転させると、(獲物の)リスが緩んだネックレスのように揺れた。

2 種類の頭韻 / 1 種類の脚韻の事例 [29]~[31]

以下の 3 事例は、2 種類の頭韻と 1 種類の脚韻を含む事例である。事例 [29] は “the rain began again, falling fine” のフレーズの各単語の語尾または語尾近くに子音 “n” を含んでいる点が特徴的であり、そのためか、頭韻よりも脚韻のほうが際立っているようにすら感じられる。これは続く 2 事例にも当てはまることであり、各引用文を音読すると、脚韻の心地良い響きが伝わってくる。

“ f ” { f } “ s ” { s } / “ (i) n (e) ” { in }

[29] Preacher stared at him [Billy Bob] until he lifted his head. As they looked at each other the *rain* began again, *falling fine* as sea spray and colored by a *rain*bow. (“Children on Their Birthdays” p.154.)

プリーチャーはビリー・ボブが頭をあげるまで彼を見つめていた。二人の目があうと、雨が再び降りはじめた。海の水しぶきのように細やかに降ってくるその雨は虹色に染まっていた。

“ s ” { s } “ l ” { l } / “ (e) d (e) ” { d }

[30] The truck hit suddenly a stretch of *wide, hard road*, unbordered by tree-shade, though a black skirt of distant pines darkened the rim of a great field that lay to the left. (*Other Voices, Other Rooms* p.14.)

トラックは突然、幅の広い骨の折れる一筋の道路へと出た。遠くには松の木々が、左手に横たわる大平原のへりを縁どっているが、この道路に木陰はなかった。

“ b ” { b } “ f ” { f } / “ s ” { z }

[31] ... and rolling *broken beads, b*usted pearls, the *b*ored snores of *fat fathers*, and... (*Other Voices, Other Rooms* p. 223.)

・・・こわれて転げまわるネックレスのビーズ、ほどけた真珠、太った父親たちの退屈気な鼾、そして・・・。

3 種類の頭韻事例 [32]

事例[32]は、“s”[s]・“f”[f]・“c”[k]の3種類の頭韻を含む事例である。“s”の頭韻は静けさを、“f”の頭韻はシルヴィアの置かれた状況と外の世界との隔たりを、そして“c”の頭韻は冷たさ(寒さ)を強調しているように感じられる。

“s”[s] “f”[f] “c”[k]

[32] Snow-quiet, sleep-silent, only the *fun-fire faraway* songsinging of children; and the room was blue with cold, colder than the cold of fairytales: lie down my [Sylvia's] heart among the igloo flowers of snow. (“Master Misery” p.172.)

雪の降る静寂と眠りの静けさのなか、聞こえてくるのは、遠くでたき火を囲んで歌う子供たちの歌声だけだった。部屋のなかは、寒さのせいで青白かった。おとぎ話に出てくる寒さよりも寒かった。私の心を雪の花咲くイグルーのなかに横たえよう。

3 種類の頭韻 / 1 種類の脚韻の事例 [33]~[35]

以下の3事例は、3種類の頭韻と1種類の脚韻を含む事例である。事例[33]と[34]は、4つの押韻が連続しており、それによりテンポの良さが醸されている。事例[35]では、引用文の中ほどに位置する“find”が、“f”の頭韻と“n(eɪ)”の脚韻の両方を含む“*fanned*”の影響を受けて、読者の耳に心地良く響いてくる。

“ m ” [m] “ squ ” [sk] “ f ” [f] / “ t ” [t] “ ed ” [t]

[33]At the left, as you entered, was a tobacco-magazine counter behind which, as a rule, sat *Mr. Marshall*: a *squat, square-faced*, pink-fleshed man with looping, *manly*, white *mustaches*. (“Jug of Silver” p. 21.)

なかに入ると、左側にはタバコと雑誌の置いてあるカウンターがあり、その奥には、大抵、マーシャルさんが座っていた。ずんぐりとした、四角い顔の男で、ピンク色の肌をしており、くるりと巻いた男らしい口髭を生やしていた。

“ m ” [m] “ b ” [b] “ f ” [f] / “ ble ” [bl]

[34]There was only one room; it contained a stove, a teetering *mirror* on top of a *marble table*, and a *brass bed* big enough for three *fat* men. (“House of Flowers” p. 202.)

部屋が一つあるだけだった。なかには、かまど、大理石のテーブルのうえの不安定な鏡、太った男でも3人はゆっくりと眠れる真鍮のベッドがあった。

“ f ” [f] “ c ” [k] “ p ” [p] / “ r(e)l ” [nd]

[35]Orange *flickerings* of the *fish fanned* around the coral *castle*, and I [Collin Fenwick] thought of the morning I'd helped Dolly find it [a bowl of goldfish], the castle, the *pearl pebbles*. (*The Grass Harp* p. 62.)

金魚のオレンジ色のゆらめきが、サンゴの城の周りを巡った。そしてぼくは、ドリーが金魚鉢、サンゴの城、真珠の小石を探す手伝いをした朝のことを思い出した。

3 種類の頭韻 / 1 種類の脚韻 / 1 種類の同韻の事例 [36]

事例[36]は頭韻と脚韻に加えて、同韻を含む事例である。“*façade*”以降に各種の押韻形式が連続し、リズムカルな流れを感じさせる。なお、“*plush like*”と“*lime like*”の接尾辞“-like”は語頭に位置してはいないが、接尾辞自体の語頭に位置するという意味で頭韻に関係していると見なしている。また、“*restless*”と“*moss*”の子音による脚韻も、これらの単語の配置の点で、脚韻と見なすにはやや難があるが、音読すると、これら2つの単語の語尾が、やはり心地良く響いてくるように感じられるため、これらを脚韻事例と見なしている。

“f”[f]“li”[lai]“s”[s] / “ss”[s] / “rest”[rest]

[36]Invisible birds prowling in leaves rustled, sang; beneath the still *façade* of *forest restless feet* trampled plush *like moss* where *lime like light* sifted to stain the natural dark. (*Other Voices, Other Rooms* p.125.)

木の葉のなかを動き回る姿の見えない小鳥たちがカサカサと音を立て、さえずった。森の静けさの下では、歩みを止めることのない足が、フラシ天のようなコケを踏みつけた。足下にはライム色の明かりがまだらとなって自然の暗がりをシミのように色づけた。

3 種類の頭韻 / 1 種類の子音韻の事例 [37]

本事例には3種類の頭韻と1種類の子音韻が含まれている。子音韻に該当する単語は、順に、“*eased*”、“*his*”、“*worries*”、“*Zoo*”、“*tales*”である。このうち、“*his*”、“*worries*”、“*tales*”のみに注目すれば、これら3語をもって脚韻と見なすこともできるが、音読をしてみると、やはり“*eased*”と“*Zoo*”の[z]の音が他の3語の[z]と共鳴して聞こえてくる。そのためにこれら5語をま

とめて子音韻と捉えている。また、子音韻ということであれば、“... Zoo told tales, tall funny sad, ...” のフレーズ中に、“{l}”の子音韻を指摘することも可能であろう (“... Zoo told tales, tall funny sad, ...”)。

“t”{t} “m”{m} “s”{s} / “(e)” “z”{z}

[37] But Joel had *talked*, and in *talk*ing *ease*d away his worries, and Zoo *told tales*, tall funny sad, and now and again their voices had *met* and *made* a song, a summer kitchen ballad. (*Other Voices, Other Rooms* p.117.)

しかしジョエルはしゃべった。しゃべっていると心配事が和らいだ。そしてズーもいろんな話をした。ほら話、おかしい話、悲しい話だ。そして、ときおり、二人の声はとけあって一つの歌になった。夏にキッチンのバラードだ。

3種類の頭韻 / 1種類の視覚韻 / 1種類の類韻 / 1種類の脚韻の事例 [38]

事例[38]は、頭韻・視覚韻・類韻・脚韻の4通りもの押韻形式を含む事例である。僅か23語からなる本事例にこれほど多くの押韻形式が含まれており、まさに「にぎやかな」事例である。また、散文に詩的雰囲気を加味するレトリックの一つに直喩があるが、本事例は“as though”という比喩標識を含む直喩表現であることを考慮に入れるとすれば、本事例の技巧上の精巧さは他の事例を抜きんでいる。

“b”{b} “p”{p} “h”{h} / “g”{dʒ・g} / “(e)a”{a:} / “t” “ed”{t}

[38]... it made her come so close, Heather Falls, as though the *gently bright gift balanced* in his [Judge Cool’s] *palm* was *part* of *her heart*. (*The Grass Harp* p.42.)

・・・そうすると、フェザー・フォールさんが身近にいるかのようなだった。ま

るでクール判事の手のひらでやさしげに輝く贈物が、フェザーさんの心臓に一部であるかのように。

4 種類の頭韻 / 1 種類の脚韻の事例 [39]・[40]

以下の2事例は4種類の頭韻と1種類の脚韻を含んでいる。事例 [39] は、すべての押韻がベンツェン医師の描写のなかで用いられている。合計5通りの押韻により、彼の人となりの滑稽味と同時に、それに対するエズラの嘲りの気持ち巧みに表現されている。事例 [40] は、“y”[i] を脚韻と見なすには配置の点でやや無理があるが、“y”で終わる単語が比較的近い位置に4語も含まれているために、敢て脚韻の事例と見なしている。

“t”[t] “f”[f] “h”[h] “m”[m] / “ish”[i]

[39] He [Dr. Bentsen] had not been of much help as an analyst, and as a lover well, once she [Ezra] had watched him running to catch a bus, *two* hundred and *twenty* pounds of *shortish*, *fiftyish*, *frizzly-haired*, *hip-heavy*, *myopic* *Manhattan* Intellectual, and she had laughed: ... (“Mojave” p. 267.)

ベンツェン医師は精神科医としても恋人としても、たいして役には立たなかった。たとえば、エズラはかつて彼がバスに乗ろうと駆けているのを見たことがあった。体重220ポンドで寸足らず。50代。縮れ毛。でか尻。マンハッタンの近眼インテリ。この姿をエズラはあざ笑ったのだった・・・。

“t”[t] “p”[p] “s”[s] “c”[k] / “y”[i]

[40] He [Joel] *t*witched, *t*wirled his *p*encil, *p* paused *t*wice to make water in the china slopjar so artistically festooned with pink-bottomed *c*upids *c*lutching watercolor bou-

quets of ivy and violet; eventually, then, the first letter, addressed to his good friend Sammy Silverstein, read, when finished, as follows: ... (*Other Voices, Other Rooms* p. 91.)

ジョエルは鉛筆を引きつったかのように動かしたり、もてあそんだりした。そして陶器の便器で用を足すために二度中断した。淡い色合いの蔓とスミレの花束を抱えたピンクの尻のキューピッドが見事な花飾りにあしらわれた便器だ。それから、ついに友人サミー・シルヴァスタイン宛ての最初の手紙が、つぎのようにできあがった・・・。

4 種類の頭韻 / 1 種類の子音韻の事例 [41]

事例[41]には4 種類の頭韻と1 種類の子音韻が含まれている。文頭から“ fruit ”までの15語に、これらすべての押韻形式が含まれる密度の濃い押韻事例である。“ (1) ” [1] の子音韻が本事例全体にわたり繰り返されているのが特徴的である。内容面では木漏れ陽の丸い輪を、直喩によって「地面に落ちた黄金の果実」になぞらえている点が詩的で美しい。

“ s ” [s] “ d ” [d] “ g ” [g] “ f ” [f] / “ (1) ” [1]

[41] Rings of sunLight, sifting through the tree, *dappled* the *dark* grass like *fallen* gold fruit; bluebottle flies swarmed over melon rinds, and a cowbell, somewhere beyond the windmill, tolled lazily and long. (*Other Voices, Other Rooms* p.106.)

木漏れ陽の丸い輪が地面に落ちた黄金の果実のように、暗い草の葉にまだらに落ちた。アオバエがスイカの皮に群がった。風車の向うから、牛の首の鈴がもうげに長く響いてくる。

5 種類の頭韻 / 1 種類の脚韻の事例 [42]

事例[42]は5種類の頭韻が流れるように連続しており、小気味好いリズムを刻んでいる。前事例で“(1)”[1]の子音韻が引用文全体にわたって繰り返されているのに似て、本事例は“s”[z]の脚韻(子音による不完全脚韻)が引用文全体をとおして散りばめられている点が特徴となっている。“(1)”[1]・“s”[z]ともに有声音であるが、後者は日本語で言うところの「濁音」であるために、読者の耳には後者のほうがより強く響く。

“s”[s] “b”[b] “j”[dʒ] “p”[p] “f”[f] / “s”[z]

[42] Neither of us [“she” and Buddy] has any. Except for skinflint sums persons in the house occasionally provide (a dime is considered very big money); or what we earn ourselves from various activities: holding rummage sales, selling *b*uckets of hand-picked *b*lackberries, *j*ars of homemade *j*am and apple *j*elly and *p*each *p*reserves, rounding up *f*lowers *f*or *f*unerals and weddings. (“A Christmas Memory” p. 215.)

ぼくたちは二人ともお金とは縁遠い。家の人たちがときおりくれるごく僅かのお金(10セントなんとぼくたちには大金だった)やいろいろな活動から自分たちで稼いだお金を別とすれば。ガラクタ市を開いたり、バケツ何杯もの手摘みのブラックベリー、手作りの瓶入りジャム、アップル・ゼリー、ピーチ・ジャムを瓶売りしたり、冠婚葬祭用の花束をこしらえたりして稼いだお金だ。

6 種類の頭韻事例 [43]

事例[43]には6種類の頭韻が連続し、前事例同様、流れるような小気味好さを醸している。“knee-deep”のフレーズに[i:]の類韻を認めるとすれば、同時に“creek”、“green”、“bees”が浮かびあがって見えてくるし、心地良く

響いてくる。配置（位置）の点で、これら 5 語を類韻と見なすことには難があるものの、6 種類の頭韻の流れるような小気味好さと相まって、読者の耳には〔i:〕の類韻も心地良く感じられる。

“g”〔g〕“b”〔b〕“s”〔s〕“d”〔d〕“f”〔f〕“h”〔h〕

[43]The creek is nowhere more than knee-deep; glossy **b**eds of moss **g**reen the **b**anks, and in the spring snowy **d**ew-**d**rops and **d**warf violets **f**lourish there like **f**loral crumbs **f**or the new bees whose **h**ives **h**ang in the waterbays. (*The Grass Harp* p. 71.)

その小川は膝より深いところはない。光沢のあるコケの床が土手を緑色に染め、春には雪のように白いまつゆき草とスミレの花が、水辺の巣で孵ったばかりのミツバチたちのための花のパン屑のように咲き誇る。

9 種類の頭韻事例 [44]

事例[44]は、物語の語り手が「その当時の早朝の食卓」を飾る料理の数々を、頭韻を踏む格好で軽快に列挙している叙述からの引用である。長文であるとは言え、一文中に 9 種類もの頭韻を含む事例は、カポーティの小説(散文)のなかでも、本事例が最多なのではなかろうか。カポーティの押韻および韻律に対するこだわりの強さを証明する典型的な事例であると言えよう。なお、文末の“hot as Hades”は、慣用句した強意的直喩であり、カポーティの創作ではない。

“f”〔f〕“ch”〔tʃ〕“g”〔g〕“c”〔k〕“p”〔p〕“h”〔h〕“j”〔dʒ〕“m”〔m〕“h”〔h〕

[44]To the present day I [Buddy] retain a nostalgic hunger for those cockcrow repasts of ham and **f**ried **ch**icken, **f**ried pork **ch**ops, **f**ried catfish, **f**ried squirrel (in season), **f**ried eggs, hominy **g**rits with **g**ravy, black-eyed peas, collards with collard liquor and

cornbread to mash in it, biscuits, *pound cake*, *pan cakes* and *m*olasses, *h*oney in the comb, *homem*ade jam and *j*ellies, sweet *m*ilk, butter *m*ilk, coffee chicory-flavored and *h*ot as *H*ades. ("The Thanksgiving Visitor" pp. 243-244.)

現在でも私は、その当時の早朝の食卓をなつかしく思い出してお腹がすいてくる。ハムとフライドチキン、フライド・ポーク・チョック、なまずのフライ、リスのフライ(季節次第)、フライド・エッグ、肉汁をかけたヒキワリトウモロコシ、ササゲ、煮汁にしたコラードとそれにつけて食べるトウモロコシパン、パウンドケーキ、糖蜜をかけたパンケーキ、ハチの巣のままのハチミツ、自家製ジャムにゼリー、スィートミルク、バターミルク、チコリーの香りをつけた舌をやけどしそうなほど熱いコーヒー。

1 種類の類韻 / 1 種類の不完全韻の事例 [45]

事例[45]は1種類の頭韻“u”[ʌ]と1種類の不完全韻“lue”[lu:]を含む事例である。類韻に該当する4つの単語の原形“suck”、“gum”、“sun”、“dull”)がすべて単音節であるために、テンポの良さが醸されている。また、“gluey”は名詞“glue”に接尾辞“y”を付け足して形容詞化した単語である。名詞“glue”と“blue”は完全脚韻となるが、“gluey”であるために不完全韻とした。脚韻の近似韻と捉えることが可能であろう。

“u”[ʌ] / “lue”[lu:]

[45]The hermit *sucked* his toothless *gums*, and the *sun* shone *dull* in his *gluey blue* eye. (*Other Voices, Other Rooms* p. 97.)

その隠遁者は歯の抜けた歯茎を吸っていた。にかわを塗ったような彼の青い瞳のなかで、太陽が鈍く輝いた。

広範囲にわたり頭韻が連続する事例 [46]

事例[46]は広範囲にわたって頭韻が連続する珍しい事例である。原書(*The Complete Stories of Truman Capote*)で 1 ページ弱にも及ぶ。引用文中に確認できる頭韻の種類と事例は、以下のとおり、8 種類、14事例である。

● “ f ” { f }

*f*loating mysterious *f*lower / *f*laking the *f*loor

● “ s ” { s }

a sign of some sort / scissors stabbed / in the suitcase, and slammed the lid shut /
surf sucking a shore / setting his suitcase in the hall, grinned sheepishly / In the
still room there was only the subtlety of shifting sunlight

● “ w ” { w }

watched *w*ith a kind of horror as it *w*altzed in the air

● “ h ” { h }

*h*awk's *h*earth

● “ p ” { p }

*p*ushed the *p*ieces into a *p*ile, *p*ut them in the suitcase

● “ win ” { win }

*w*ind from their *w*ings

● “ he ” { hi: }

*H*e *h*eaved

● “ d ” { d }

*d*rifted *d*ownward

本事例は物語の主人公であるヴィンセントが、まるで気が狂ったかのように錯乱状態に陥っている場面からの引用である。上記の頭韻の14事例は、彼の

精神状態を混乱へと誘っていく、あたかも呪文であるかのように響いてくる。

なお、本稿の趣旨からは外れるが、引用文中に下線を施しているように、比喩標識“like”に導かれる直喩表現が10回も繰り返されている点も特徴的である。これらは、読者の想像力を刺激し、そのぶん、引用文の詩的雰囲気を強めてもいる。

● like a floating mysterious flower

● like a sign of some sort

● like a broken-down pianola

● like a ribbon bow over the loose head

● like a star

● like a ravening steel mouth

● like cuttings of stiff hair

● like surf sucking a shore

● like a thief

● like a tricky scrap of crayon paper

[46]A butterfly. He'd [Vincent had] never seen a butterfly in this city, and it was like a

floating mysterious *flower*, *like* a sign of some sort, and he *watched with* a kind of horror as it *waltzed* in the air. Outside, somewhere, the razzledazzle of a beggar's grind-organ started up; it sounded *like* a broken-down pianola, and it played *La Marseillaise*. The butterfly lighted on her painting, crept across crystal eyes and flattened its wings *like* a ribbon bow over the loose head. He fished about in the suitcase until he found her scissors. He first purposed to slash the butterfly's wings, but it spiraled to the ceiling and hung there *like* a star. The *scissors stabbed* the *hawk's heart*, ate through canvas *like* a ravening steel mouth, scraps of picture *flaking* the *floor like* cuttings of stiff hair. He went on his knees, *pushed* the *pieces* into a *pile*, *put* them in the suitcase, and slammed the lid shut. He was crying. And through the tears the butterfly magnified on the ceiling, huge as a bird, and there were more: a flock of liltling winking yellow; whispering lonesomely, *like* surf sucking a shore. The *wind* from their *wings* blew the room into space. *He heaved* forward, the suitcase banging his leg, and threw open the door. A match flared. The little boy said: "Whatcha doin', Mister?" And Vincent, setting his suitcase in the hall, grinned sheepishly. He closed the door *like* a thief, bolted the safety lock and, pulling up a chair, tilted it under the knob. In the *still* room there was only the subtlety of shifting sunlight and a crawling butterfly; it *drifted downward like* a tricky scrap of crayon paper, and landed on a candlestick. ("The Headless Hawk" pp.113-114.)

一匹の蝶。ヴィンセントはこの街で蝶を見たことはなかった。それは宙に浮かぶ神秘的な花のようでも、何かの前兆のようでもあった。彼は一種の恐怖心を抱いて、ワルツのように宙を舞う蝶を見つめた。外ではどこかで乞食が手回しオルガンで派手に演奏をはじめた。壊れた自動ピアノのような音で『ラ・マルセイエーズ』を弾いていた。蝶はD.J.の絵のうえにとまり、水晶の目のうえを横切り、乱れた髪の上に蝶結びのように羽根を広げた。ヴィンセントはスーツケースのなかをひっかきまわしてD.J.の鉄を見つけた。彼は蝶の羽根をめった切りにするつもりだったが、蝶はらせんを描いて天井へと舞い上がり、星の

ようにとまった。鉄は鷹の心臓を突き刺し、飢えに狂う鋼鉄の口のようにカンバスに穴をあけ、絵の切れ端が切り取った堅い髪のように床を覆った。ヴィンセントはひざまづいて、切れ端を一まとめにしてスーツケースに入れ、ふたをボタンと閉めた。彼は泣いていた。涙目に映る蝶は、天井で鳥のように大きくなった。一匹だけではなかった。軽快に瞬く黄色の群れだった。岸边をなめる波のように佻しく囁いている。群れの羽根が起こした風が部屋を空中へと吹きあげる。彼はスーツケースを脚にぶつけながら前へと進んでいきドアをあける。一本のマッチがパッと燃えあがる。幼い男の子が言った、「おじちゃん、何してるの?」ヴィンセントはスーツケースをホールに置き、おどおどした笑いを浮かべる。彼はこそどろのようにドアをしめ、セーフティロックをかけ、椅子を引っばってきて、それをドアノブの下に斜に固定する。静かになった部屋のなかには、微かに動く日の光と這うように動く蝶だけだった。蝶はクレヨンでうまく描かれた切り抜きのように下のほうに舞い降りてくると蠟燭立てにとまった。

結び

本稿ではカポーティの12の作品から46の事例を取りあげ、それらを19とおりの押韻形式に分類し、その個別について若干の考察を試みてきた。46事例中、脚韻のみの事例は、に挙げた僅か3事例のみであり、その他の43事例にはすべて頭韻がかかわっている。ここでは、頭韻を中心に据え、これまでの考察を振り返っておきたい。

頭韻に関するカポーティの散文の特徴は、(1)“x”と“z”を除くすべての子音字が頭韻に活用されており、(2)頭韻に関わる単語のほとんどが単音節の単語であること、また、(3)一文中に4語を超える単語間の頭韻がごく普通にみられるということである。さらには、(4)一文中に複数種類の頭韻を含むこともけっして珍しくはなく、最多の事例では9種類の頭韻を含む場合もある。そして最

後の事例に明らかなように、例外的であるとは言え、(5)およそ1ページにも及ぶ広範囲で、いくつもの頭韻が繰り返される事例があることにも驚かされる。

(6)頭韻を含む英文中に、頭韻以外の押韻形式が含まれる場合が多いこともカポティの散文の特徴である。その組み合わせは、頭韻と脚韻・頭韻と脚韻と同韻・頭韻と子音韻・頭韻と脚韻と視覚韻と類韻・頭韻と不完全韻など、実に多岐にわたっている。こうした多様性が、カポティの散文に音楽的かつ詩的な雰囲気を生ぜしめる要因となっていることは明らかであろう。

注

- (1) 大園弘『カポティ小説の詩的特質 音と文彩』春風社、2016 参照。
- (2) 佐々木健一監修『レトリック事典』大修館書店、2006 . p 84 .
- (3) 同書、p 89 .
- (4) 岡崎正男『英語の構造からみる英詩のすがた』開拓社、2014 p .112 参照。
- (5) 小学館ランダムハウス英和大辞典編集委員会編『小学館ランダムハウス英和大辞典』小学館、1973 pp 2402 2403 .
- (6) 同書、p .160 .
- (7) 同書、p .1265 .
- (8) “she” は [ʃ] の発音であるため、厳密には他の単語群とは区別する必要があるだろうが、ここではリーチにならない、これらの単語も子音 “s” による頭韻に含んでいる。リーチは “sun shone smoothly” というフレーズの3つの “s” を子音の反復とみなしている。リーチ、G.N.&ショート、M.H.『小説の文体 英米小説への言語学的アプローチ』石川慎一郎・瀬良晴子・廣野由美子訳 研究社、2003 . p 23 . 参照。なお、事例〔2〕の “shirt”、“Shepherd”、事例〔3〕の “shrub” も同様である。
- (9) Capote, Truman. *The Complete Stories of Truman Capote*. New York: Vintage, 2004, pp. 42-43. 以下、原文からの日本語訳はすべて筆者による。なお、*Other Voices*, *Other Rooms* と *The Grass Harp* からの引用は、つぎの版を原典とし、それ以外の作品(短編小説)はすべて上記の版を原典とする。*Other Voices*, *Other Rooms*. New York: Random House, 1948. *The Grass Harp*. New York: Vintage, 1993.
- (10) 頭韻は語の冒頭の子音(字)を核とするという原則があるが、佐々木は和歌を例にとり、「母音による(子音なし)頭韻」と見なしうる事例を挙げている。佐々木、

前掲書、p.85.

本稿では佐々木に倣い、半母音 “w”〔w〕ではじまる複数の単語間の音の一致も頭韻と見なしている。

参考文献

- Capote, Truman. *Other Voices, Other Rooms*. New York: Random House, 1948.
. *The Complete Stories of Truman Capote*. New York: Vintage, 2004.
. *The Grass Harp*. New York: Vintage, 1993.
- Leech, G.N. & Short, M.H. *Style in Fiction: A Linguistic Introduction to English Fictional Prose*. London: Longman, 1981.
- 大園弘『カポーティ小説の詩的特質 音と文彩』春風社、2016.
- 岡崎正男『英語の構造からみる英詩のすがた』開拓社、2014.
- 佐々木健一監修『レトリック事典』大修館書店、2006.
- 小学館ランダムハウス英和大辞典編集委員会編『小学館ランダムハウス英和大辞典』小学館、1973.
- リーチ、G.N.&ショート、M.H.『小説の文体 英米小説への言語学的アプローチ』石川慎一郎・瀬良晴子・廣野由美子訳 研究社、2003.